

JAZZ JAPAN

欧州ジャズ・フェス・レポート2022

Umbria Jazz / Jazz À Juan / Nice Jazz

John Coltrane ブルー・トレインの全貌

桑原あい デビュー10周年作はいかにして生まれたか…

大橋美加×海原純子 Jazzスタンダード対談

ジャズ・オーディオ武者修行

パラダイム ペルソナ スピーカーで広がるジャズ新世界
かわさきジャズ2022

Interviews Aaron Heick/MAYA/Kazuhiro Ozaki/Julian Lage/Enrico Rava/
Anniversary(Rei Takagi)/ Ricardo Bacelar etc.

NOVEMBER.2022

Vol.

146

The Bootleg Series Vol.7
That's What Happened
1982-1985

Miles Davis

SUGIZO×小川隆夫 エレクトリック・マイルスを語る

ブラジルからMPBの名曲の数々に新しい息吹を与えた1枚のアルバムが届いた。作曲家/ピアニストのヒカルド・バセラルによるカバー・アルバム『コンジェニト』は、カエターノ・ベローゾ、ジルベルト・ジル、シコ・セザールなどの珠玉の名曲に新たな解釈を施し、厳選された12曲を取録。全ての楽器の演奏や編曲・プロデュースもバセラルが一人で手がけている。前作『パラコズモ』から約1年3か月ぶりとなる新作について、バセラルに話を聞いた。

「今作は新しく作ったジャスミン・スタジオで様々な実験をしているうちに生まれた。リズムをモザイク状に組み合わせ、自分が好きな曲、統一感のある曲を集め、原曲を再解釈する試みの中で全ての楽器を自分一人で演奏したら、どうなるだろうと思ってね。アルバム・タイトル曲でルイス・メロチアの〈コンジェニト〉は“生まれもつての、先天的な”という意味があるんだけど、まさに自分自身“マルチ・ヒカルド”をバズル状に芸術として昇華させた結果といえるね」

シングル曲の〈オ・ウルチモ・ボルド・ソル〉(「最後の日没」の意)は、アラブ音楽、ブラジル北東部の音楽、そしてサンバ・チホーダ(バイーア地方に起源を持つサンバの源流のひとつ)に影響を受けている。

「この曲は最初にレコーディングした曲で、全てはここから始まった。夢の中にヴォーカル・アレンジが出てきて、目覚めたときに頭の中に残っていた。ハーブを彷彿とさせる中世起源のダルシマーなどのエキゾチックな楽器を、ピアノ、ストリングス、フルートと組み合わせ、ビリンバウも最後の方で演奏している。MVは私の故郷であるセアラ州の砂丘や漁村を映し、歌詞と重なる印象的な風景とサウンドを結びつけた、ポエティックなものになっている。またここではサウンドを深く探求し、ブラジル文化の幾つものエッセンスで溢れる音の饗宴に仕上げた」

曲を選ぶにあたってリサーチをしながら、時には妻のマヌエラや、娘のサラとマリアにもアドバイスをもらった。それから自身の声に当てはめて、少しずつ感情移入し新解釈を進めていっ

たという。

「選んだ曲に新しいアレンジを施し、少しだけサプライズを加えるんだ。リスナーに何かエキサイティングなものを提供できれば、それがレパートリーとして入ってくる。料理みたいにバランスと反応を楽しむ感じだね。もちろんオリジナルのメロディと歌詞にたくさんのリスペクトをもってね」

『コンジェニト』を一人でレコーディング&プロデュースしていく中で、彼にとって一番のチャレンジとは何だったのだろうか。「2か月の実験の期間中、エンジニアのミスターMelk以外は全て一人で音楽と向き合わなくてはならなかった。一人でプロデュースすること自体が大きなチャレンジだった。でも、ありがたいことにミスターMelkがいたし、妻も娘もいた。ヴォーカルを重なる時が一番難しかったかな。でも多くのことを学んだし、レコーディング・プロセスは楽しかったよ。レコーディングこそは私の情熱であり、やりがいでもあるからね。終わることはないし、芸術の中にこそメッセージがあるんだ」

一部の曲では日本で手に入れた尺八や篠笛、三味線などを演奏しているほど、親日家でもあるバセラル。2018年に来日した際には埼玉県のパラジバ人学校を訪問し、今後も日本とブラジルを往復し、両国をつなぐ架け橋として活動を続けていきたいと語る。

「日本にはとても親近感を抱いているので、いつも戻りたいと思っている。来日した際は家族を連れて、いろいろな街に出かけた。そこでの温かい歓迎とふれあいに感動してね。音楽的にはジャズハウス・サラヴァ東京(※現在は閉店)でプレイした時の静寂と緊張感が忘れられない。誰もが完璧なアティチュードで私の一挙手一投足に注目していた。どの国でも、こんな体験をしたことはないし、美しい瞬間だった。それ以来、日本でレコードを出すためにずっと働きかけてきたし、これからも同じ情熱をもって、活動していきたい。インタビューやラジオ番組でも、日本からは最大のリスペクトを感じるし、私もまたこの美しい芸術性を続けていきたいね」

ヒカルド・バセラル

Riccardo B

サウンドを深く探求し、ブラジル文化の幾つものエッセンスで溢れる音の饗宴に仕上げた

落合真理●文
TEXT MARI OCHAI

この作品のレビューはP119輸入盤ページに掲載しております。



cellar